

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

村山和夫先生

日 時：2014年9月23日

場 所：新潟県上越市春日野

聞き手：茨木智志・志村喬・大木匡尚

### はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、村山和夫（むらやま かずお）先生がお引き受け下さった。村山先生は1929年のお生まれで、新潟県高田市（現・上越市）で小学校以来の学業を終えた後は、上越地域を中心に中学校社会科教師として活躍された。その間に、研究会において社会科教育の実践とともに郷土に対する探究を進められてきた。特に、郷土史についての多くの著作を刊行され、その活動は現在も継続している。今回は、上越教育大学で社会科教育（地理教育）を担当している志村喬先生にも参加して頂いた。

以下は、村山先生のインタビューの記録である。

### 1. 生い立ち

— 本日は、よろしくお願ひいたします。村山先生は、新潟県上越市の高田城（高田公園）の近くにありす西城町で生まれ育ったと伺っていますが。

西城町の4丁目で過ごしました。家の東側には東本町小学校があり、子どもの声が聞こえてきました。戦前は、六ノ辻と呼ばれていました。高田城下には一ノ辻から六ノ辻まであって、最後の辻になります。言うなれば、<sup>かちゅう</sup>家中屋敷ですが、足軽長屋があったところです。閑静な一面、道が細いので、雪が降ると、<sup>おおあさ</sup>（大字西城町）になるような感じでした（笑）。とはいえ、法隆寺論争で有名な関野貞<sup>1</sup>博士も、同じ町内の五ノ辻長屋のお生まれです。

私の家は、榊原藩の家臣でした。幕末期には五石ほど与えられ、御預所方の役を務めま

<sup>1</sup> 関野貞：1868～1935年、建築史専攻。法隆寺非再建論を主張した。

<sup>2</sup> 榊原藩：藩主の榊原家は、姫路から高田に寛保元（1741）年に転封されてのち、6代130年にわたり高田

した<sup>3</sup>。もともと、侍の時代には、今の裁判所<sup>4</sup>の近くの栗原医院のところの青田川のわきの長屋にいました（現・上越市本町）。その後、高田に師団が入る<sup>5</sup>ということで、道を切られて、それで転々とまわって、西城町に来ていたわけです。

しかし、私が生まれたのは、東京にあった母の実家の清水家でした。そこは、父母と兄を亡くした小林茂（古径）<sup>6</sup>が寄寓した家でもありました。私の誕生日は、昭和 4（1929）年 6 月 18 日ですが、戸籍簿には「東京本郷弓町一丁目七番地五<sup>7</sup>ニ於テ出生 父村山紀一郎届出 昭和四年六月式拾壹日受付入籍」と見えています。

父・村山紀一郎<sup>8</sup>が高田師範学校<sup>9</sup>の教頭をしていました。父は学生のときに、本郷弓町の清水の家に寄寓をして、東大（東京帝国大学）に通っていました。その後、父が母と一緒に、高田に戻って暮らしていました。

母方の祖父（清水宣輝<sup>10</sup>）は、旧高田藩士の清水岩太郎（宣義）<sup>11</sup>の子として生まれ、明治の世を迎えると、いち早く一家は上京しました。宣輝は、渋沢栄一<sup>12</sup>に経済学を学んで大蔵省銀行局貸費生となって、欧米の銀行経営を視察・研究して帰朝すると、十五銀行<sup>13</sup>の支配人になりました。

当時の本郷弓町の屋敷は、旧藩主の榊原家と向かい合っていました。藩政時代では、とても考えられないことでした。祖父の趣味は、碁くらいなもので、楽しみは郷里から上京してきた者の面倒を見ることでした。前島密<sup>14</sup>・関野貞・尾田信忠・黒田貞治・増田義一らと図って、上越学生舎<sup>15</sup>を設けたのも祖父でした。

---

藩 15 万石の藩主をつとめ、明治維新後は子爵となった。

<sup>3</sup> 上越市史専門委員会近世史部会編『史料集・高田の家臣団』（上越市史叢書 5、上越市、2000 年）に「村山藤右衛門」の記載がある。

<sup>4</sup> 裁判所：新潟地方裁判所高田支部。

<sup>5</sup> 高田に師団が入る：陸軍第 13 師団の師団司令部が 1908 年に高田に移転してきたこと。これを機に、高田城下の町人地を中心とした高田町と高田城下の武家地を中心とした高城（たかぎ）村が同年に合併して、新たな高田町となり、1911 年に市制を施行して高田市となった。

<sup>6</sup> 小林茂（古径）：1883～1957 年、日本画家。

<sup>7</sup> 本郷弓町 1 丁目 7 番地 5：東京府東京市本郷区。現在の東京都文京区本郷 1 丁目付近。

<sup>8</sup> 村山紀一郎：1902～1937 年、心理学専攻。

<sup>9</sup> 新潟県高田師範学校：1899 年に設立（当初は新潟県第二師範学校）。師範学校は、初等教員養成のための学校であり、当時は、2 年制の高等小学校卒業生が学ぶ本科一部（5 年間）、5 年制の中学校卒業生が学ぶ本科二部（2 年間）、そして専攻科（1 年間）があった。高田師範は男子部のみであった。

<sup>10</sup> 清水宣輝：1856～1934 年。

<sup>11</sup> 上越市史専門委員会近世史部会編・前掲『史料集・高田の家臣団』に「清水岩太郎」の記載がある。

<sup>12</sup> 渋沢栄一：1840～1931 年、官僚・実業家。生涯にわたり、経済・社会・文化・教育・外交などの数多くの事業を手がけたことで知られる。

<sup>13</sup> 株式会社十五銀行：華族の出資により 1877 年に第十五国立銀行として設立された普通銀行。

<sup>14</sup> 前島密：1835～1919 年、官僚・政治家。日本の郵便制度の創設者として知られる。出生地の上越市下地部には郵政博物館別館・前島記念館がある。

<sup>15</sup> 上越学生舎：上越出身の男子大学生のため東京在住の有志が経営した寮で、1905 年の創立から 2000 年の廃寮までに約千人を送り出した（松枝迪夫編『ある学生寮物語—青春の軌跡 100 年—』アドスリー、2001

なお、宣義（岩太郎）の父である清水治郎左衛門の妻おとらは、村山家から清水家に嫁に入り、清水家から私の母が村山家に嫁ぐなど、安政の大獄<sup>16</sup>のころからのお付き合いとなりましたが、このような高田藩をめぐる因縁話は、私の代で終わりです。

## 2. 高田師範学校附属小学校

— 小学生のときの授業についてお聞かせ下さい。

小学校は、昭和 11（1936）年に高田師範学校附属小学校<sup>17</sup>に入ります。各学年 2 学級 30 人くらいずつでしたが、なぜか自分の学年だけは 1 学級の 47 人で、卒業まで行きました。赤穂浪士の四十七士みたいですね（笑）。女子は、その内の 17 人でした。

担任の先生は、1 年から 5 年まで星野恭誌<sup>18</sup>先生でした。

— 星野先生は活躍されていた先生と聞いていますが。

そうです。自分が社会科をやったのも星野先生の影響かもしれません。

先生の研究会が近づいたころのことと思います。「今日は自習」とか言われて、先生は地図にドットを落としてドットマップを作られていました。当時、統計数値を点描で表わす地図が新しい表現として注目された時代でしょうか。信頼関係があるから、「今日は自習」と子どもたちに言っても、自分の手の中に入れて掌握されていたのでしょう。

クラスの同級生で地元に残った者は家業を継ぎ、銀行員や公務員になったりしました。教師になったのは、体育教師になった三浦厚君と私の二人でした。なかには、父親がレルヒ<sup>18</sup>の研究者で、レルヒの娘さんからレルヒの日記<sup>19</sup>を借りるために、父親とともに渡欧して研究の手伝いをした者、立教大学の総長や電器会社の社長になったりした者もありました。

— ドットマップを使った授業とかはありましたか。

さだかには覚えていませんけど、あったと思います。

---

年)。

<sup>16</sup> 安政の大獄：1858～59 年における大老・井伊直弼による反対派に対する弾圧。死罪を含む多くの処罰者を出した。

<sup>17</sup> 新潟県高田師範学校附属小学校：現在の上越教育大学附属小学校（上越市西城町）。

<sup>18</sup> テオドール・フォン・レルヒ：1869～1945 年。オーストリア＝ハンガリー帝国の軍人として来日し、1911 年 1 月に高田で一本杖スキーの指導をした。高田の金谷山には、日本スキー発祥の記念碑・記念館、レルヒ像がある（上越市大貫）。

<sup>19</sup> テオドール・フォン・レルヒ著、中野理訳『明治日本の思い出—日本スキーの父の手記—』（中外書房、1970 年）として、まとめられている。

— 子どもたちを連れてどこかに見学とかは、いかがですか。

子どもを連れて見学するとかは、なかったようです。校外に出た記憶としては、高田城の外堀の写生に出たときのことですが、現在の上越市の総合博物館の裏手に置かれた忠魂碑<sup>20</sup>の話が記憶にあります。そんな時代でした。

— (志村) 星野先生は、1934年に「高田市本町通交通調査」で高田の通行量を子どもに調査させていますが<sup>21</sup>、何か調べてくるようにという指導はありましたか。

1934年は、私の就学以前のことであり、お話のような計画的な校外学習の記憶はありません。

— 当時の小学校の歴史教科書をいくつか持ってきました。どれを使われたのか、ご記憶にありますか。また、歴史の授業で印象に残っていることはありますか。

この教科書(5期<sup>22</sup>)かなとは思いますが、よくは分かりません。

ただ、ここに載っている歴代天皇の名前は覚ええましたね<sup>23</sup>。星野先生がドットマップを作っているときに、「じんむ(神武)、すいぜい(綏靖)、あんねい(安寧)、いとく(懿徳)、…」と覚えていたのかもしれませんが(笑)。

— (志村) 私が上越市史のお仕事を村山先生とご一緒したときに、星野先生のお話が出たことがありました。そのときに、村山先生は、「星野先生は、おっかなかった」とおっしゃっていましたね。

よく叱られました、まだやることがあると言うハッパでした。星野先生は、高田師範学校での父の生徒であり、その循環かも知れません。

話は前後し錯綜しますが、同じく高田師範学校の卒業生の尾崎庸四郎<sup>24</sup>先生からもご指

<sup>20</sup> 高田公園内の内堀と外堀の間にある上越市立総合博物館の裏手(東側)の場所に、久邇宮邦彦書の「忠魂碑」が「高田連隊区管内一市八郡」により1927年に建てられていた。その後、高田公園南側の忠霊塔のわきに移された。

<sup>21</sup> 星野恭誌「高田市本町通交通調査」『郷土研究』第2巻第1号、高田師範学校附属小学校、1934年1月。本誌を含めた高田で発行された地理教育誌については、志村喬「1930年代に高田で発行された地理教育研究誌：『郷土・地理研究』と『郷土研究』」(『新潟地理フォーラム』第1号、新潟地理談話会、2005年)を参照。

<sup>22</sup> 5年生で文部省『小学国史 尋常科用 上巻』(1940年)を、6年生で同下巻(1941年)を使用したと思われる。一般に第5期国定歴史教科書とされているものである。

<sup>23</sup> 戦前の国定歴史教科書には「御歴代表」が掲載され、小学生は124代(当時)の歴代天皇を暗唱することが求められた。

<sup>24</sup> 尾崎庸四郎：1902～1991年、地理学・社会科教育専攻。

導ご厚誼を頂きました。とりわけ、尾崎先生が主管された『日本地誌<sup>25</sup>』の新潟県編の上越関係の執筆者として久保田好郎・山崎静雄両氏とともに加えて下さいました。各巻の執筆者を見ますと、教授・博士と名を連ねられるなか、目をかけて頂き、ありがたく思っています。

6年生になったときは、柄沢栄夫先生が担任になりました。「自習で好きにしろ」というのから、様子がガラッと変わって、柄沢先生はもっぱら武道の先生でしたので、「裸足で木刀の素振りでもしてろ」という感じになりました。

私が卒業するときには、小学校が国民学校になっていました<sup>26</sup>。国民学校最初の卒業生になります（1942年3月）。

### 3. 父・村山紀一郎

— 村山先生が小学生のときに、高田師範学校の教頭でいらしたお父様の村山紀一郎先生が陸軍に召集されて間もなく戦死されたといいました。

父が戦死したとき（1937年10月）、私は小学校2年生でした。

父は大学で心理学を専攻しました。父と青木誠四郎<sup>27</sup>氏は、同学とか同門とかと、新潟大学高田分校にいらした心理学の池上喜八郎先生に言われた記憶があります。日中戦争が始まり（1937年7月）、父は応召し、戦死しました。同部隊で、同日に戦死したのが、今の新井高校<sup>28</sup>の教頭で、同じ東大でフランス文学を専攻した先生でした。たしか当時は、36歳で予備役が終わりであったかと思いますが、総力戦の名目に、予備役が終わる前に使わないといけないということで、両人が使われたのかもしれませんが。

英語もドイツ語もできるものだから、高田の軍隊に外国から人が来たら、軍に通訳に呼ばれたりしたこともあったと聞いています。

— 村山紀一郎先生の論文を持ってきました<sup>29</sup>。子どもの箸の訓練に関するものですが、ここに、被験者の子どもが出てきます。

それは、私かも知れませんね（笑）。

---

<sup>25</sup> 日本地誌研究所編『日本地誌』、全21巻、二宮書店、1967～1980年。第9巻（1972年）が「中部地方総論・新潟県」である。

<sup>26</sup> 教育審議会の答申により、私立学校を除く小学校は「皇国民」の「錬成」の場として1941年4月から国民学校に改められた。1947年4月発足の戦後の新学制により小学校となった。

<sup>27</sup> 青木誠四郎：1894～1956年、心理学専攻（東京帝国大学文学部哲学科卒業）。

<sup>28</sup> 新潟県立新井高等学校：当時は新潟県立新井農商学校と新井町立実科女学校であった（妙高市田町）。

<sup>29</sup> 村山紀一郎「幼年者に行へる用箸運動の練習効果について」、編集代表・広瀬錦一『増田博士謝恩 最近心理学論文集』岩波書店、1935年。

— 戦死された後に発行された『村山紀一郎先生流芳録<sup>30</sup>』を持ってきました。ここにいくつかの写真が掲載されています。

これ(写真「歌と水茎のあと」)が最後の手紙です。辞世の句になる「こほろぎの 鳴く音 わびしき 戦に 荒れにしあとに たむろするかも」が出ています。この句は、軍国主義ではありませんね。この写真(「遺族の方々」)に写っているのが私です。3人兄弟で弟が2人です。これ(写真「ある日の団欒」)は、鹿野写真館(現・上越市寺町)で撮ったものです。写真館の裏手に田んぼがあって、そこで撮ったのを思い出します。戦死の直前くらいです。

思い出すことは、父の書斎にあった色紙、積み木、絵図などです。たぶん、心理学に関わる実験の用具かと思います。あるとき、面白そうだからもらいたいと、父に言ったときに、「やらんねえ」と断られました。ところが、しばらくしてから、「みんな何してもいいぞ」と言われて、もらったのを、不思議に覚えています。召集令状が届いて身の整理をしたときであったと思います。残念ながら、それらは残っていません。

— 『村山紀一郎先生流芳録』には、高田師範学校で葬儀が行なわれたと書かれています。

写真(「告別式(橋本高田師範学校長ノ弔辞)」)の場所は、附属小学校の体育館です。高田師範学校は、昭和10(1935)年(7月11日)に火災で焼けて講堂もありませんでした。

当時、全国的な不況に見舞われて、教員も過剰であり、新潟県教育会<sup>31</sup>でも師範学校の統一論が唱えられていました<sup>32</sup>。それで、校舎を焼失した高田師範学校は厳しい状況下に置かれました。しかも、高田師範の火災は放火であるとされました<sup>33</sup>。そして、寄宿舎の炊事夫が逮捕され、取り調べにおいて自白したとして新潟地方裁判所高田支部に送られました。このような極めて不利な裁判にあたって弁護を務めたのが、竹内金太郎<sup>34</sup>弁護士でした。竹内弁護士は、旧高田藩士の出で、父が在京中に世話になった義父の清水宣輝の住まいと同じ本郷弓町1丁目に、事務所兼住宅がありました。竹内弁護士は、高田の将校の奥さんが犬を連れての朝の散歩のときに漏電していたのを見たという無罪を証明する法的

<sup>30</sup> 編集兼発行人・新潟県高田師範学校内 伊比見作『村山紀一郎先生流芳録』1938年10月。本書によれば1927年に高田師範学校教諭、1937年3月に陸軍歩兵中尉、9月11日に応召、25日出征、10月21日に上海戦線において戦死、1938年1月27日に高田師範学校で告別式とされている。

<sup>31</sup> 教育会：全国・府県・郡市・町村などの単位で組織された教員や教育関係者、地方有力者などを構成員とする戦前における教育団体。中央・地方の教育に大きな影響力を持った。1870年代後半から始まり、敗戦になると、いくつかの例外を除いて解散された。

<sup>32</sup> 師範学校の統一論とは、新潟県内の新潟・長岡・高田の3師範学校を新潟に統合させるという主張。

<sup>33</sup> 新潟大学教育学部高田分校編集発行『高田分校三十年史』(1981年、7頁)では、「内部のものが放火するような学校では、大事な教員養成などやらせられない」として、火事の原因が放火であるということが高田師範を廃止すべしという主張の有力な口実となっていたと説明している。

<sup>34</sup> 竹内金太郎：1870～1957年、弁護士。

証人を見つけました。そして、放火と決めつけられているが、そうではなくて完全に漏電だということになって、ひっくりかえしました（1937年7月）。

このことに関して、父が残した記録はありませんが、竹内弁護士と連携を図って、頑張ったのではないかと思っています。その後、高田師範は昭和13（1938）年に再建されて、コンクリート造りの白亜の殿堂になります。

余談になりますが、竹内弁護士は、阿部定事件（1936年）とか、ゾルゲ事件（1941年）とか、東京裁判（1946～1948年）とか、右から左からの裁判の弁護をした日本の有数の弁護士でした。

#### 4. 戦争中の旧制高田中学校

— 進学された高田中学校<sup>35</sup>の入学試験はどのようなものでしたか。

入学試験は、太平洋戦争（1941年12月～）が始まった翌年の昭和17（1942）年の春かと思います。入学試験は筆記試験と口頭試問がありました。口頭試問の部屋の壁には、「撃ちて止まむ<sup>36</sup>」の兵隊のポスターが掲げられていたように思います。このポスターを示されて、試問官から、「戦争が始まったが、どう思うか」と尋ねられました。私は、「困ったことになりました」と答えました。すると、試問官からは、「よし、もういい」と言われました。そのとき一瞬、「非常時にあたって国の総力を挙げて戦わなければ」と答えなければ落とされるのではないかと思いました。試問官は3人ほどでしたか。

そうして、昭和17（1942）年4月に高田中学校に入学しましたが、入学して1週間で怪我をしたため、1年間休学しました。旧制中学校はふつう5年間のところを、私は6年間、いました。そのため、古い名簿には2か所に私の名前が載っていたことがありました。なお、戦後の新学制の発足にもなって、同級生でも旧制中学校を卒業した生徒と、新制高等学校に移行した生徒とがあり、古い名簿には移行期の混乱が見られました。

— 戦争中の高田中学校の様子は、どのようなものでしたか。

高田中学校は、戦争が始まって、まだ良識的であったと思います。軍事教官もみんな年寄りでした。軍事教官をつかまえて、「おいさ」「おいさ」（おじいさん）と呼んでいました。その「おいさ」が、モチに砂糖つけて食いたいかという講話をしたことがありました。腹が減っては戦にならない、という話をしたのだと思いますが、聞いていた我々はケラケラと笑った覚えがあります。けれども、笑って怒られた覚えはありません。そのく

<sup>35</sup> （旧制）新潟県立高田中学校：現在の新潟県立高田高等学校（上越市南城町）。

<sup>36</sup> 撃ちて止まむ：神武東征を記した記紀の歌謡の一節。「撃っておわろう。即ち撃たないでおくものかの意」（倉野憲司他『古事記 祝詞』岩波書店、1958年、158頁）。陸軍の戦意高揚のポスターとして1943年に配布されたものがよく知られる。

らしいの、ゆるやかな軍事教官でした。自由というわけではありませんが、ゆるやかで、しめつけはなかったと思います。少なくとも、どんどん軍の学校に志願しなければいけないという雰囲気はありませんでした。

— 戦争中の歴史の授業はいかがでしたか。

1年生（1943年度）のときは、国史よりもアジア史を勉強した覚えがあります。竹内正三先生の授業でした。竹内先生は、「～があったす」とか「よす」とかが口癖で、「あったす」・「よす」と、あだ名で生徒からは呼ばれていました。インド史のところはアショーカ王とかですから、まだ面白かったですけれども、中国史に入って武帝とか同じような名前がやたらにたくさん出てきて、「勘弁してくれ」と思ったのをよく覚えています。

— 当時の『中等歴史<sup>37</sup>』という国定教科書を持ってきましたが、これを使われたでしょうか。この教科書の内容は東洋史と西洋史ですので、アジア史を勉強したというお話と合っていますが。

教科書があったのか、なかったのかも、はっきり思い出せません。

— この教科書は、出だしが「わが大日本帝国は神国であり、皇国である」（「序説」）で始まるようなものですが、授業の内容はいかがでしたか。

竹内先生は、そんなのは飛ばしてやったのだと思いますよ。高田中学校は、まだ自由な雰囲気がありました。高田師範学校では丁寧に扱われていたものと思われませんが。

— 戦争中の中学校は、勤労働員があつて勉強もできずに大変だったと伺いますが。

2年生のとき（1944年度）から、勤労働員で農業の手伝いに行ったりしていました。

3年生（1945年度）では、直江津の信越化学<sup>38</sup>にも行きました。ここにはオーストラリアの捕虜がいて、彼らはメタル工場に行っていました<sup>39</sup>。捕虜は見ていましたが、名前なんか分からないから、「ジャック」「ジャック」と、みんなが呼んでいました。あちらも「おう」とか答えていました。赤い飯を食っていると思ったら、コーリャン（高粱）かなんかでした、米でなくて。

それから、今の上越総合技術高校のグラウンドあたりにあった兵器<sup>しょう</sup>廠<sup>40</sup>（現・上越市本城

<sup>37</sup> 文部省『中等歴史一』中等学校教科書株式会社、1944年。

<sup>38</sup> 直江津の信越化学：信越化学工業直江津工場（現・上越市頸城区）。

<sup>39</sup> 東京俘虜収容所第四分所（いわゆる直江津捕虜収容所）には、オーストラリア兵を中心とする連合国軍の捕虜が収容されていた。厳しい条件のもとで捕虜に多くの死者が出たこともあり、戦後にBC級戦犯として8名が死刑判決を受けた。跡地は平和記念公園となっている（上越市川原町）。

<sup>40</sup> 兵器廠：兵器の補給等を担当した陸軍の機関。当時は、高田陸軍兵器補給廠であった。



町) から、錆びて使いものにならないような格納されていた兵器や弾薬を、高田駅(信越本線)まで運んだのは私たちでした。こんな兵器で何が本土決戦かと思いました。監督の軍人の名前は、「なべや」中尉と聞こえたようでした。

勤労働員から交替で学校に戻って少し授業を受け、そして、また動員という感じでした。上の学年は愛知の豊田に行っていたので、そうはいかなかったと思いますが。下の学年は、松の根っこ掘って、松根油<sup>41</sup>をつくっていたといいます。そんな時代ですね

— 村山先生の学年ですと、兵隊に行った人はいないと思いますが。

いや、予科練<sup>42</sup>に入った者はいました。昭和20(1945)年5月5日に、予科練に行く同期生の壮行式を、春日山神社<sup>43</sup>でやりました。そのときに黒井の爆撃がありました<sup>44</sup>。土煙が上がったのが、山から見えました。

— 8月15日(1945年)はどちらにいましたか。

終戦の昭和20(1945)年は、学徒動員として自宅から二本木の日曹工場<sup>45</sup>に通っていました。当初、この工場での仕事として、ガソリンのオクタン価を高める有機鉛化合物を製造する作業場(78工場?)に配置されました。この78工場は、軍の直轄の工場でした。任務は、軍の管理者とともに作業進行の記録や監視をすることでした。飛散した有機鉛化合物を吸い込むと体に良くないとのことで、短期間の仕事でした。その後、総務付きになり、生徒・職員の来場人数、生徒の配置などの記録係を命ぜられました。

8月15日は、戦争の終結放送を聞き、晴天の太陽を見上げました。疎開していた写真家の濱谷浩<sup>46</sup>は、高田でこのときの太陽を撮影していました。上越市史の現代編に、この写真のことを書きましたが、私も図らずも同じ太陽を見上げました<sup>47</sup>。

— それで、8月15日で勤労働員は終わりになったのでしょうか。

---

<sup>41</sup> 松根油：松の根を乾留することで得られる液体。航空機のガソリンの原料として1945年に入って各地で松の伐採が行なわれたが、実用には至らなかったという。

<sup>42</sup> 予科練(海軍飛行予科訓練生)：海軍の航空機搭乗員の養成制度。海軍の宣伝もあり、大戦末期には多くの十代後半の若者が志願した。

<sup>43</sup> 春日山神社：上杉謙信を祀る1901年創建の神社(上越市大豆)。高田平野を一望できる標高189mの春日山城の中腹にある。

<sup>44</sup> 黒井の爆撃：1945年5月5日午前11時過ぎ、B29爆撃機により信越化学工業直江津工場を目標に投下された50キロ爆弾6個が、黒井駅(信越本線。現・上越市頸城区)付近に落ち、死者3名・負傷者5名の被害を受けた。

<sup>45</sup> 二本木の日曹工場：日本曹達株式会社二本木工場(現・上越市中郷区)。

<sup>46</sup> 濱谷浩：1915～1999年、写真家。疎開先の高田で1945年8月15日正午の「玉音放送」のときに「敗戦の日の太陽 高田」を撮影している。

<sup>47</sup> 上越市史編さん委員会編『上越市史 通史編6 現代』上越市、2002年、12～13頁。「終戦の玉音放送とその日の太陽」として記載されている(村山和夫執筆)。

8月15日で動員は終わりにになりました。その8月15日の勤労働員が終わった日に、日曹工場の地下道を通して二本木駅（信越本線）に行くとき、かなりの人数の朝鮮の人たちが並んでいました。暴力を振るうでなく、声をかけることもありませんでしたが、強い視線から、「お前たちは、戦争に負けたんだ」、「時代が終わったんだ」という印象を受けました。無言の姿勢で示したものでしょうか。印象深いものがありました。

## 5. 戦後の旧制高田中学校

— 戦後になっての高田中学校での授業はどのようなものでしたか。また、教科書の墨塗りや社会科の授業はありましたか。

終戦のときは中学3年生でした。普通でしたら4年生であったはずですが。

教科書の墨塗りは分かりませんね。だいたい教科書は記憶にありません。講義だけ聞いているような気がしました。むしろ、英語の教科書があったことは、よく覚えています。

でも、戦争後も「あったす」・「よす」の竹内先生の授業があったことは、記憶にあります。やはり日本史よりも東洋史の記憶がありますので、私は日本史を中学校では習ってなかったかもしれません。そういえば、西洋史は勤労働員の合間に戻ったときにありました。

社会科については伊藤先生からお習いしたと思いますが、教科書や講義についての記憶はありません。それから、学徒動員中の登校日に、戸田正誠校長が物理の集合講義において、「作用あれば反作用あり」の説明の中で、「男と女の関係も同じだ」と言われたことを覚えています（笑）。たぶん、学徒動員でくたびれた生徒の眠気を覚ますジョークであったと思われる。

— 戦後に発行された『日本の歴史』、『西洋の歴史』、『人文地理』の教科書<sup>48</sup>を持ってきましたが、ご記憶にありますでしょうか。

どれも分かりません。地理の先生は深石精一先生で、さがない学童はあだ名を「色さん」と付けました。深石先生の板書は丁寧で、色チョークで多様に使い分けられ、丁寧な文字で書かれて略図も見事でした。先生の講義のノートを残してあればと思っております。

— 他に、戦後の高田中学校で印象にあることはございますか。

9月ごろでしたか、進駐軍が高田中学校に来たのは覚えています<sup>49</sup>。ニューヨーク兵ではなかったかと思います。

---

<sup>48</sup> 『日本の歴史 上・下』（文部省、1946年）は戦後の旧制中学校用に作成された国定教科書である。一部の新制高校でも副教材として使用された。中等学校教科書株式会社による『西洋の歴史（1）』（1947年）と『人文地理（1）』（1947年）は、社会科の選択科目用に作成された一種検定本教科書である。

<sup>49</sup> 進駐軍：連合国の占領軍を進駐軍と称した。高田には1945年9月から1946年2月まで米軍が進駐し、高田中学校に隣接する旧陸軍の兵舎等が利用された（現・陸上自衛隊高田駐屯地、上越市南城町）。

このとき、上級生が、下級生を一斉に座らせて説教をしていました。下級生が上級生に対して敬礼しなかったとかでの風紀やモラルの向上会が、戦争が終わっても、ありました。そうしたら、軍事教育の延長と思っただのか、進駐軍がそばに来て、「今、何をしているんだ」と英語の先生に尋ねて、私の横にいた英語の先生が、「クラブ活動をしている」と答えたのを、進駐軍が怪訝な顔して聞いていたのを変に覚えています。私には英語はよく分かりませんが、「club」うんぬんと答えたのが聞こえました（笑）。

進駐軍は高田には翌年2月くらいまでいました。「高田中学校の運動場を進駐軍によこせ」と言ってきたことに対して、生徒が使うからだめだと、校長が跳ね返して、何時から何時までならいいと条件付きで貸しました。これも印象にあります

昭和21（1946）年に4年生となり、昭和22（1947）年に5年生となって、昭和23（1948）年3月に高田中学校を卒業しました。私は、旧制中学校の最後の卒業生になります。

## 6. 師範学校入学

— 高田中学校卒業後のことをお聞かせ下さい。

昭和23（1948）年4月に、師範学校に入学します。高田師範学校は戦争中に新潟第二師範学校になっていました<sup>50</sup>。師範学校の最後の入学生になります。

実は、私は就職試験を受けていました。のちの社会保険庁が職員を募集していました。今も西城町3丁目にありますが<sup>51</sup>、これに同級生3～4人で受けました。一緒に受けた同級生は、社会保険庁に入りました。他に、北陸農試<sup>52</sup>の職員の試験も受けました。

その発表のある前に、師範学校の本科1年生の補欠募集が出ました。6・3・3制になって、教員がたくさん必要になるということでの補欠募集だと思います。教員が足らなかったのでしょうか。補欠の募集がありましたから、師範学校に入りました。

師範学校に入りましたら、小学校教員ですので、音楽や体育、絵もやらなくてははいけないことになりました。「これは参った」ということになりました。

ちょうど昭和24（1949）年から新しく新制大学が始まることになりました。そこで、新潟大学教育学部高田分校<sup>53</sup>を受験して、師範学校を1年でやめて、入学することになりました。新制大学の最初の入学生になります。

---

<sup>50</sup> 師範学校は1943年の師範教育令改正により、中等学校卒業生の入学を基本とする（旧制）専門学校程度の官立の学校に昇格した。新潟県高田師範学校は、1943年4月に官立新潟第二師範学校となり、戦後の1947年4月には女子部を新設していた。

<sup>51</sup> 現在の日本年金機構上越年金事務所（上越市西城町）。

<sup>52</sup> 北陸農業試験場：現在の独立行政法人農業技術研究機構中央農業総合研究センター北陸研究センター（上越市稲田）。

<sup>53</sup> 新潟大学教育学部は、新潟第一師範学校男子部（新潟市）、新潟青年師範学校（新発田市）、新潟第一師範学校女子部（長岡市）、新潟第二師範学校（高田市）が統合して組織された。当初、高田分校には、教育学部教育学科の前期（2年課程）と教育学部芸術学科の4年課程が置かれた。

## 7. 新潟大学高田分校

- ここに「新潟大学学生募集要項（抄）教育学部」があります<sup>54</sup>。受験教科は、国語・英語・理科の3教科で、中学校社会科は高田で17名募集となっていますが、受験のときはどのような様子でしたでしょうか。また、なぜ、中学校社会科を選んだのでしょうか。

英語だの数学だのは、専門がはっきりしています。何となくやれるというのが、社会科でした。社会科というのは、何をやるか分かりませんでした。何だか分からんから、何とかかなるだろうと、怠け心から、これがいいやというわけで受験しました。そうしたら、中学校社会科は倍率が一番高くて、3倍を超えていたと聞いています。自分と同じ考えを持った者が、いっぱいいたわけです。ただ、落ちて、師範にいればいいのか、居場所はありました。

国語の試験は、島崎藤村の『破戒』の一節が文例であったのではないかと思います。英語は、「ラクダは砂漠の船である…」と言ったような文があったように思います。高田中学校では、1・2年生の授業において英語が行なわれましたので、知り得た単語で推察しました。理科は、限りなく0点に近かったと思います。17名募集とのことですが、19名取っていました。私は、アイウエオ順で最後でもあり、19番目かと思います（笑）

- 新製の国立大学は、発足が遅れて6月に入学試験、7月に入学式となったと聞いていますが。

遅れましたね。休みがあつて、いい塩梅だという感じでした。

- 村山先生は、戦後の社会科教員養成で学ばれた一期生に当たると存じます。ご自身が社会科を学ばずに、社会科の教師を選ばれたのは、なぜでしょうか。関連して、昭和22（1947）年から社会科が始まっていましたが、ご存知でしたか。

社会科という言葉を意識したのがいつかは分かりません。先ほども言ったように、社会科しかできないということではないかと思います。良くも悪くもデモンカではないでしょうか。それから、私が社会科を受けたのは、小学校のときの担任の先生の星野先生のおかげですね

- 星野恭誌先生について、もう少し教えて下さい。

星野先生は、附属小学校を異動で出られてから、後に校長になられて、最後は新井小学校<sup>55</sup>校長でした。

<sup>54</sup> 記念誌編集部編『公孫樹下の八十年』東京法令出版、1982年、327頁。

<sup>55</sup> 新井市立新井小学校：現在は妙高市立新井小学校（妙高市白山町）。

面白い先生でした。高田公園に、今は三重櫓<sup>みやぐら</sup><sup>56</sup>が復元されていますが、いち早く注目されたのは、星野先生でした。昭和30年代末（1964年頃）のころから、星野先生が「高田城に角櫓をつくらんきやいけん」と説かれました。私にも「櫓をつくるのを勉強するように」と言われて、私も中村憲三先生、田中正先生らと高田城談義の仲間に入りました。いわば上越社会科教育研究会創設者の顔ぶれでした（後述）。やがて、その動きは、昭和43（1968）年1月に、高田文化協会会長・小和田毅夫、上越人物史研究会会長・中村辛一、新潟県社会科教育研究会会長・田中正の連名で、「高田城角櫓復元による郷土資料館建設に関する請願書」として、高田市長と市議会議長に提出されることになりました。その結果、角櫓は無理であるが、郷土資料館は高田市として最後の事業として実施されることになりました（現・上越市立総合博物館）。凶らずも私は博物館建設準備委員会の委員の委嘱を頂きました。

星野先生は、理論的に何かを教えるというよりも、こういうふうに幅広く社会を見ると、自分でやっていた手法を、職人みみたいな姿で、私に見せてくれたのではないかと思います。

—（志村）昭和20（1945）年秋に、星野恭誌先生と牧田利平先生が作った「郷土地図帳」という地図帳が発行されましたが、ご存じですか。これは、戦前から続く形のものであったのでしょうか<sup>57</sup>。

「郷土地図帳」は、分かります。これは、戦後に新しく作ったものだと思います。高田師範学校にいらした安田初雄<sup>58</sup>先生の影響ではないでしょうか。

なお、牧田先生といえは、先生が昭和61（1976）年に野島出版から刊行された『名家系譜 越佐人物誌』の作成過程において、資料の提供をさせて頂きました。

— 当時の高田分校の様子をお聞かせ下さい。

当時は朝鮮戦争（1950年6月～）の直前くらいで、どちらかという左傾した学生たちが自治会の中心になっていました。そのような動きの中、分校主事の渡辺六郎先生から、「進駐軍（CIE<sup>59</sup>？）から日本人の霊についての調査が来たが、君にしてもらいたい」と頼まれたことがあります。1年生のときでした。霊をどう見ているかとか、死生観とか、特攻隊もありましたし、あちらは占領するだけあっていろいろ調べていたのでしょうか。父

<sup>56</sup> 高田城三重櫓：高田城は、徳川家康の六男・松平忠輝のもとで慶長19（1614）年に国役普請により4か月で築城され、三重櫓は、松平光長（17世紀後半）の時代に建設された。明治3（1870）年にその他の建物とともに火災により焼失していたが、1971年の上越市発足の20周年記念事業として、1993年に復元されている。

<sup>57</sup> 1934年に、星野恭誌編「最新新潟県地図」（田村寅吉〔長岡市〕発行）が発行されている。

<sup>58</sup> 安田初雄：1909～2004年、地理学専攻。

<sup>59</sup> CIE：占領軍の一部局である民間情報教育局（Civil Information and Education Section）。

が心理学を専攻していたことを渡辺先生も知っていたのでしょう。当たらず遠からずのことを書いたことしか、今では覚えていませんけど、それが最初の仕事でした。

- 『高田分校三十年史』を見ますと、社会科として、哲学研究室、法・経・社研究室、歴史研究室、地理研究室とあります<sup>60</sup>。村山先生は歴史研究室でしょうか。

たしかに社会科関係の研究室はありましたが、学生の履修課程に論文提出の定めはなかったもので、研究室に所属することはありませんでした。どちらかというと歴史の研究を好んだのは議論好きの学生で、地理の研究に傾斜したのはフィールドワークを好んだ学生でした。

高田分校のフィールドワークは、高田師範にいらした安田初雄先生が築かれた素地を、井上春雄<sup>61</sup>先生が引き継がれていました。現職の教員を交えたフィールドワークも行なわれました。さらに、この伝統は、後任の林正巳<sup>62</sup>先生へと引き継がれました。

- (志村) 安田初雄先生は、山崎直方<sup>63</sup>先生から地理学を教わった景観地理学派の流れをくむ研究者と聞いています。丁寧に歩いてフィールドワークを行ない、景観を地図に落として考える。その辺が星野恭誌先生に出ているのかとお話を伺いましたが。

そうかもしれませんが、直接、そのようなお話をお聞きしたことはありませんでした。

- 教育実習はどちらに行かれましたか。

大町中学校<sup>64</sup>です。大町中学校は、今は城北中学校になっています(後述)。大町中学校は活発な活動をしていました。社会科の一人の先生が病気で、休みがちになりました。他の社会科の先生から、「君は社会科を専攻しているのだから、大学の授業の合間の好きなきに、監督がてら、見学がてらに大町中学校に来なさい」、「君の勉強にもなるぞ」と言われて、高田分校から近いものですから、実習後も大町中学校に行っていました。普通なら代替の先生が来るものですが(笑)。

- 履歴を拝見すると「前期修了」とありますが、2年間でしょうか。

2年間で前期修了です。後期を修了するためには、さらに2年間、新潟に行かなくては いけませんでした。当時、家の収入はありませんでしたから、前期修了で就職することに

<sup>60</sup> 新潟大学教育学部高田分校・前掲『高田分校三十年史』、153～160頁。

<sup>61</sup> 井上春雄：1903～1979年、地理学専攻。

<sup>62</sup> 林正巳：1914～2003年、地理学専攻。

<sup>63</sup> 山崎直方：1870～1929年、地理学専攻。

<sup>64</sup> 高田市立大町中学校：現在の上越市大町にあった中学校。1959年に春日中学校と統合して城北中学校となる。

しました。前期修了でも、単位を取って中学校二級免許状<sup>65</sup>は取れるわけです。後期まで行けば、中学校一級免許状が取れるはずでした。当時、前期修了で出る者と後期に進む者の割合は半々くらいでした。

## 8. 松之山中学校東川分校赴任と大町中学校の日本史教科書

— 初任校はどちらでしょうか。

昭和 26 (1951) 年に、私は松之山中学校の東川分校<sup>66</sup>に赴任しました。東川分校は、山のまた山の中にありました。2年間、ここで勤めて、大町中学校に移ります。

— 村山先生が松之山にいらした時期は、社会科の学習指導要領が変わっていく時期かと思います。ここに当時発行された中学校社会科の学習指導要領<sup>67</sup>をお持ちしましたが、お読みになりましたか。

この学習指導要領は、私が卒業したときの昭和 26 (1951) 年に出たものですね。買いました。「座右の銘」として、読まないけれど置いておきました (笑)。そういう記憶があります。

— 当時、中学校社会科には、一般社会と日本史が置かれていました<sup>68</sup>。まだ日本史の正式な教科書がなかった時期になりますが、教科書としては何を使用しましたか。

日本史の授業はしましたね。松之山中学校東川分校の日本史教科書は、大町中学校のお古をもらって使っていました。大町中学校は、すごい学校で、日本史の学習指導要領<sup>69</sup>が出ないうちから、独自に日本史の教科書を作りました。私が教育実習で大町中学校に行っていた時期には、日本史の教科書がちゃんとあったわけです。

— 大町中学校のどなたが書いたのでしょうか。

作ったのは高橋修治という社会科の教頭先生、それから中村憲三・茂利<sup>もりとおる</sup>了・清水八郎の3名の先生がたです。教育実習のとき、私に「君も勉強に来なさい」と言ったのが中村

<sup>65</sup> 中学校教諭二級普通免許状：旧法による教員免許。現在の中学校教諭二種免許状に対応する。

<sup>66</sup> 松之山町立松之山中学校東川校舎：現在の十日町市松之山東川にあった分校。1973年廃校。

<sup>67</sup> 文部省『中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ 中等社会科とその指導法 (試案) 昭和26年 (1951年) 改訂版』明治図書出版、1951年。

<sup>68</sup> 1947年に始まった中学校社会科は、1～3年の総合的な「社会」(一般社会)とは別枠で、2～3年の「国史」(1949年から「日本史」に改称)が置かれていた。

<sup>69</sup> 文部省『中学校・高等学校学習指導要領社会科編Ⅱ 一般社会科 (中学校1年～高等学校1年、中学校日本史を含む) (試案) 一昭和26年 (1951) 改訂版一』明治図書出版、1952年。

先生で、肋膜炎<sup>ろくまくえん</sup>とかで一時、休養されたのが茂利先生でした。先見の明というか、日本史をベースにしなが、調べる社会科学習、計画的学習というのをテーマにして、調べるのをこの教科書でということをやっていました。大町中学校は独自の動きをしていました。

書名は、ただ「日本史」だったと思います。縦書きで、挿絵もありました。注を大事にして、本文の上に注をいっぱい入れたものだったと思いました。子どもにとっては迷惑な教科書だったかもしれません。単元ではなくて、通史で構成されていました。

他の中学で、このような教科書があったかは分かりませんが、大町中学校のような例は珍しいと思います。どこかに残っていてくれればいいのですが。

## 9. 大町中学校から城北中学校へ

— 次に行かれた大町中学校はどのような学校でしたか。

それで昭和28(1953)年に、松之山から大町中学校に異動しました。ここに7年いました。大町中学校は、現在ありません。今の大町小学校の場所でした。あんな狭いところに1000人も入っていました。大町中学校は、現在は城北中学校になっています。ただし、新校舎をつくるのに、国から資金をもらうにあたり校舎は城北小学校として造りました。1～2年ほどしたら、大町中学校と校舎を交換して、大町小学校ができて、大町中学校は城北中学校になったわけです。昭和34(1959)年のことです。このときに、私も城北中学校に移ります。

当時、高田には中学校と言えば、大町中学校、城南中学校<sup>70</sup>と、新潟大学教育学部附属高田中学校<sup>71</sup>の3校しかありませんでした。大町中学校の教員には、高田師範学校の卒業生が多く、城南中学校には、高田師範学校の卒業生もいましたが、多様な大学の出身者が多かったようです。

大町中学校の校長は、阿部猛比子<sup>たけひこ</sup><sup>72</sup>先生でした。阿部先生は高田師範学校同窓会の会長であり、県下の新教育のリーダーでもありました。大町中学校の「計画的学習」では、学習展開は教えるというよりも、生徒たちに調べさせる学習を重視して、自主性に支えられた学ぶ力を育てることに力点が置かれてきました。具体的には、設定された課題を解明する手順を策定し、調査結果を報告して課題についての討論を進めるという手続きで実施されていました。高田師範の学風の現われと思いました。

なお、この大町中学校の社会科と附属中学校の社会科の教員が中心になって、上越社会科教育研究会が設けられます(後述)。

<sup>70</sup> 高田市立城南中学校：現在の上越市大手町にあった中学校。後に上越市立城南中学校となり、1980年に新道中学校と統合して、城東中学校となった(上越市本城町)。

<sup>71</sup> 新潟大学教育学部附属高田中学校：現在は上越教育大学附属中学校(上越市本城町)。

<sup>72</sup> 阿部猛比子：1900～1977年。1946年に大町国民学校(高等科)校長に赴任し、1947年の同校の大町中学校への変更を経たのち、1959年の定年まで同校に在職していた。



— 村山先生が大町中学校に着任されたときも教科書は独自のものでしたか。また、ちょうど中学校社会科は、総合でやるか、3 分野でやるかが議論された時期になりますが<sup>73</sup>、どちらでしたでしょうか。

私が大町中学校に移ってきたときには、新しい検定教科書を使っていました。教科書は、分野別でした。このへんでは、総合はなかったと思います。上の高校が相手で、総合でなく、分野別で系統性のある教科書が選択されるようになりました。なお、高等学校進学者が増えてきたことも、社会科教育のあり方を変えたように思われます。

— 大町中学校に、独自のカリキュラム案はありましたか。

ありました。独自のカリキュラムを作っていました。ただ、学校が引越したりしていますので、残っていないかなと思います。

— 城北中学校では、どのようなことをなさっていましたか。

私が城北中学校に移ると、翌年か、翌々年かと思いますが、田中正教頭先生、久保田好郎<sup>よしろう</sup><sup>74</sup>先生が着任されました。両先生との出会いによって、上越社会科教育研究会は全県的な活動の展開を目指して、新潟県社会科教育研究会と改組されました（後述）。以後、久保田先生とともに本会の運営に携わることになりました。

当時、城北中学校は1 学級 50 人編成で各学年 13 学級ほどありました。クラブ活動が重視された時代であり、地理クラブと歴史クラブを設けることになりました。地理クラブの顧問は、久保田先生と私が担当しました。歴史クラブは、高田分校中学校社会科での同期の剣持利夫氏が担当することになりました。

そのころ、城北中学校では国語教育が盛んで、この年、読書感想文のコンテストにおいて内閣総理大臣賞を受賞しました。ならば、地理クラブの成果も問いたいと思っていたところ、学習研究社で中学生の研究を育てたいとの趣旨で、「才能開発コンテスト」が設けられたことを知りました。コンテストに応募した作品は、クラブ員とともに現地調査を進めてきた報告書で、題名は「上越における戦後の入植開拓」でした。論文の内容はともかく生徒の目で確かめた報告であり、上位の評価を得たいと願っていたところ、図らずも第一位の内閣総理大臣賞を受賞しました。また、私の転出後になりますが、久保田先生の指導

<sup>73</sup> 1955 年版中学校社会科学習指導要領（1956 年 2 月）発行前後において、総合的な社会科を維持するか、3 分野（地理、歴史、政治・経済・社会）に分けた社会科とするかが大きな論議となり、教科書も 2 つの種類が発行された。結果的には分野別の社会科となっていく。

<sup>74</sup> 久保田好郎：1923～2009 年。久保田好郎の新社研での活動については、阿部真隆・市村理子・加納隆徳・渡邊優輔・曾我尚子「上越地方における社会科教育の実践—地域素材の教材化を中心に—」（筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻社会科コース編集・発行『自然と暮らし』第 15 号〔2007 年度地理学野外実験報告書—新潟県上越市—〕、2008 年）が略年譜や著作目録を作成して詳細に論じている。

と職員の努力が認められ、「読売教育賞」が贈られました。

— 法政大学を卒業されたのは城北中学校にいらしたときでしょうか。

法政大学の入学（文学部史学科）は、昭和32（1957）年の4月かと思います。新潟大学前期での修得単位をベースにして、通信教育と夏季の教室講義を受け、大学卒業に必要な単位を修得しました。卒業は、昭和34（1959）年の9月で、城北中学校在職中でした。通信教育ができたばかりのことで、卒業証書番号は33号でした。勤めと並行しての学習ですので、なるべく早く単位を取得するために、通信教育の認定試験は東京の他、実施内容に合わせて千葉、長野、新潟などの各地に出かけました。

卒業論文として「横町留女の成立とその変遷<sup>75</sup>」を提出して審査を受けました。最後の面接試験の中で、「相愛の男女がともに死ぬことを心中というが、その他の言い方は」との試問もありました。論文題の延長とも思われ、「相対死とも」と答えましたが、地理分野とは世界が異なり、冷や汗ものでした。

通信教育を受けたのは、中学校一級と高校二級の社会科教員免許状の取得のためでした。履修したのは史学であり、ここで〈変節〉したわけです（笑）。高校二級免許状を取得したころは高校の学級増の時期で、「どうですか、高校に来られませんか」と誘いがありました。が、「私は中学で務めたい…」と申してお断りいたしました。その中に、中村憲三先生の高校転出にからんだ話もあったようですが、中学校で過ごしてよかったと思っています。

## 10. 新潟県社会科教育研究会（新社研）

— （志村）新潟県社会科教育研究会について伺います。新潟県社会科教育研究会の前身である上越社会科教育研究会の始まりについて、『高田分校三十年史』には次のように書かれています。

井上春雄の指導する地域調査法は、地理学徒として欠かすことの出来ない方法であり、フィールドワークがすっかり定着するようになった。このような大学における研究活動は、自然に大学の地理学教室と現場教師集団の中に新しいサークル活動が展開されるようになった。この頃形成されたいくつかのサークル活動の中の一つである上越社会科教育研究会は、1948年頃に自然発生的に誕生したが、その理論的背景は本大学の地理学教室の指導であった<sup>76</sup>。（下線は引用者）

また、次のようにも書かれています。

1949（昭和24）年5月22日午後2時、高田市立城南中学校において上越社会科研究

<sup>75</sup> その要旨は、村山和夫『高田摘誌—源氏車の栄光—』（北越出版、2001年）に収録されている。

<sup>76</sup> 新潟大学教育学部高田分校・前掲『高田分校三十年史』、158頁。

会の発会式が行われた<sup>77</sup>。

この間のことで、ご存知のことをお聞かせ下さい。

私はまだ学生でしたが、教育実習は昭和 25 (1950) 年に大町中学校で受けることになり、中村憲三先生から「教師たるもの日頃の研修が大切である」との講話の中で、上越社会科教育研究会についてのお話を聞いた覚えがあります。昭和 28 (1953) 年には大町中学校に着任しましたので、わりに早いうちに研究会の動きを知ることができましたが、設立の詳しい経緯は存じません。大町中学校の中村憲三先生と、中村先生と同期で附属中学校にいらした西村芳夫先生の両先生が、高田分校にいらした井上春雄先生と相談して立ち上げられたものと思われます。

— (志村) 私の知る限りですけど、井上春雄先生は地形学と社会科教育を専門にして、文部省から派遣されて社会科教育の調査にアメリカに行ったこともあったそうですが、社会科教育的なこともお話しになっていませんか。

そうですね。井上先生の講義は、内容が豊かであって、理論的であったと覚えております。フィールドワークも熱心でした。それで、中村先生らと図られ、地理分野の研究を核にして上越社会科教育研究会を立ち上げられたものと思います。なお、大町中学校では生徒用の歴史教科書を編纂して実践した実績もあり、期待されての発足と思われます。さらには、師範学校時代に安田先生が残された「高田市の景観<sup>78</sup>」に代表される地域調査の手法とその報告を見逃すことはできないと思います。

井上先生から、アメリカの社会科の話もありましたが、遠い国の話という感じでした。大学では、単元学習とか、ダルトンプラン<sup>79</sup>だとか、社会科学学習の方法論も学びました。大町中学校において教育実習を受けた当時、中学校の社会科の教科書は 18 冊くらいあったと思います<sup>80</sup>。1 学年あたり 6 冊という感じでした。

何冊もあって、これが単元だと言っても、バラバラなのを一括する。土地のこと調べると、天然資源についても生産のやり方についても分かるし、こっちにも入れられる、あっちにも入れられる。上越の酒造りの現状のことを調べると、米がとれる所がどこかとか。そういうことを、わりに早いうちからやろうと考えていたのが、上越社会科教育研究会の態度でした。これは、井上先生の影響があったと思います<sup>81</sup>。

<sup>77</sup> 久保田好郎「同好組織の拡充」、新潟県社会科教育研究会編集発行『郷土新潟県的生活風土』、1984年、333～334頁。また、新潟県教育史研究会編『新潟県教育史夜話 頸城編』（東京法令出版、1973年、400頁）では、1949年「6」月とされている。

<sup>78</sup> 安田初雄「高田市の景観」『地理学評論』第15号第7号、日本地理学会、1939年7月。

<sup>79</sup> ダルトンプラン (Dalton Plan) : 1920年にアメリカのパーカーストにより始められた一斉授業を排して生徒が各自の能力に応じた自主的な個別学習を進める新教育法。ドルトンプランとも言う。

<sup>80</sup> 1947～1951年ごろの中学校の（一般）社会科用の教科書は、文部省により単元別に作成された。

<sup>81</sup> 井上春雄監修、西山芳夫・中村憲三編集で『郷土「新潟県」に立脚した中学校社会科指導の手引—指導

— 研究会は、新潟大学教育学部高田分校の井上春雄先生をかこんで結成されたのですが、高田分校の他の先生方はどのような形でこれに参加されていましたか。

特に、高田分校の歴史学の中村辛一<sup>82</sup>先生と地理学の林正巳先生がいらして、うまく引き継がれていきました。

昭和30年代に入って大町中学校が城北中学校になってから、田中正先生が教頭で、私も社会科にいました。そのときに、やるなら大きいほうがいいと、名称を上越社会科教育研究会から新潟県社会科教育研究会に変えました。新潟からは文句を言われましたけどね(笑)。

のちに上越教育大学が発足しますと、同じように多くの先生がたから支援して頂きました。朝倉隆太郎<sup>83</sup>先生からは、開学以前からご指導を頂いておりました。昭和44(1969)年かと思いますが、朝倉先生から「新社研で何か研究論文があれば、日本地理教育学会の機関誌『新地理』で紹介したいのだが、どうだろうか」と、原稿掲載のお誘いが、久保田・新社研会長にありました。久保田先生と話し合っ、て、ならば、高田・直江津合併問題を主題にすればタイムリーな報告になろうと判断しました。そして、「高田・直江津両市の合併とその問題点—広域都市形成の一例として—」と題して、昭和45(1970)年に久保田・村山両名の共同研究として報告しました<sup>84</sup>。ありがたいことに、学会の本年度の最優秀論文であるとお褒めを頂きました。現在の目で見ると粗さや不備が見られ、地理関係の報告は難しいものと感じ入っております。機会を与えて頂いたことに感謝しております。

新社研の年度の総会や研修会には、上越教育大学の先生がたから講演をして頂きました。谷津栄寿先生は、どの会合にも参加して下さいました。「どうして、そこまで」とお尋ねすると、「私は会員ですから」と申され、頭の下がる思いでした。加藤章<sup>85</sup>先生には、久保田好郎先生が私の退官に合わせて企画された「韓国史跡探訪」の指導講師を務めて頂き大変に光栄に思っております(後述)。

— 村山先生の「退官記念特集」が掲載されています新社研の紀要を持ってきました<sup>86</sup>。研究会の紀要には、内容に関わる「研究論文」と、指導法的な「学習指導論文」が両方ともにあって、バランスよく掲載されています。

---

計画と内容の解説—(上越社会科教育研究会、1951年10月)が発行されている。

<sup>82</sup> 中村辛一：1911～2000年、日本史学専攻。

<sup>83</sup> 朝倉隆太郎：1921～2002年、地理学・社会科教育専攻。

<sup>84</sup> 久保田好郎・村山和夫「高田・直江津両市の合併とその問題点—広域都市形成の一例として—(その1～3)」『新地理』第18巻第1～3号、日本地理教育学会、1970年6・9・12月。

<sup>85</sup> 加藤章：1931年生まれ、日本史学・歴史教育専攻。

<sup>86</sup> 『社会科研究紀要』第25集、新潟県社会科教育研究会、1990年3月。ここに「村山和夫先生略歴・研究歴」と村山和夫「榊原政令公関係年表」が掲載されている。

そうですね。ですが、どちらかという研究論文を優先していました。この号（第 25 集）では、上越というテーマで考古学とか、水利権とか、こんな中学校でも教えもしないような話が出てきます。

— このような研究と学習指導のバランスという研究会のあり方は始めからでしょうか。

それを意識してやってきたと思います。基礎研究も大事にしようというのが新社研でしたし、一人が研究も実践もやるのが原則でした。やはり井上先生が「学習指導はどうした」と強く言っていた影響がある世代の人間が残っていたからでしょう。

このことは、研究会として継続されてきましたね。時代が変わってクルクルと変わるものとは違ったものが、継続されてきました。新社研としては、それが幸せだったと思います。そして、たくさんの方が勉強しようと言って集まっていました<sup>87</sup>。

— 受験の圧力と地域に学ぶという矛盾は、新社研ではありましたか。

それは、いつも問題にしなから、過ごしてきたな、という感じはしますね。けれども、結局は教員の力を付けることが色々な形で指導力になるというようなのが、新社研の通してきたことです。地域を調べるのは通してきました。教材研究で単元学習はどうだと言って研究会を開くよりも、地域でどんな問題があるとか、どういう歴史があったとかの発表が、新社研の研究紀要の大半を占めていました。最近では、教材の展開とかが多くなるでしょうけど。

— 新社研は巡検がすごいですね。昭和 28（1953）年以來、今日まで 60 回ほどになると聞いています。

先ほどもお話したように、韓国にも行っています（1989 年）。ちょうど加藤章学長（上越教育大学）が韓国とおつきあいを始めたときでした。先方の学長は日本語で話すけど、こちらは誰もできないのを見て、理解度の違うことが身に染みた旅行でした。

私が会長のときには、インド・ネパールまで行きました（1986 年）。時間的な余裕もありましたし、今とは時代も違いました。それでなければ、インドまで行っていられません。「どうせ行くのなら、インドだ」と私が言ってね。あのころにインドに行って、本当によかったです。若い通訳の人が、日本人より日本語が上手でした。台湾にも行って、本にしました（1978 年）<sup>88</sup>。やろうと言うと、みんなのできた時代でした。

<sup>87</sup> 新潟県社会科教育研究会が刊行した成果については、村山和夫「定着してきている研究刊行事業」（新潟県社会科教育研究会編・前掲『郷土新潟県の生活風土』）等を参照。

<sup>88</sup> 以上の巡検の成果は、新潟県社会科教育研究会著作・発行『韓国史跡探訪—古代日本海文化圏の追究—』（1990 年）、同著作・発行『インド・ネパール巡検記』（1986 年）、同著『台湾をゆく』（古今書院、1979 年）として、まとめられている。

## 1.1. 附属高田中学校での執筆

— 城北中学校の後は、どちらに行かれたのでしょうか。

城北中学校には4年在職し、昭和39(1964)年の新潟地震の年に、三島郡の越路中学校<sup>89</sup>に赴任しました。次いで、昭和42(1967)年から新潟大学教育学部附属高田中学校に、4年間、勤めました。高田市と直江津市が合併して上越市が誕生した昭和46(1971)年に、上越市教育委員会に移りました。このころ、中学校社会科の学習指導要領の改訂があり、文部省の伝達講習会に出席しました。地理的分野の解説は朝倉隆太郎先生でした。

その後、昭和49(1974)年に中頸城郡の柿崎中学校<sup>90</sup>に教頭として着任し、3年間、勤めました。柿崎中学校は、学校統合の直後でした。昭和52(1977)年には、三島郡小国町の法末小学校<sup>91</sup>の校長として勤めました。法末小学校は山村の小学校で、すべてが未経験の勤務で新鮮でした。ここでの勤務は1年で終わりました

そして、昭和53(1978)年に、再び附属高田中学校に、本校最後の副校長として3年間、勤めました。上越教育大学開学を迎えていた時期で<sup>92</sup>、第1回生の入学試験には、上越教育大学の先生・職員の数が少なかったことから、面接試験・実技試験には、附属高田小・中の副校長は補助に当たりました。その後、私は第1回入学式(1981年)に続くオリエンテーションにおいて、「地域紹介」の講師を務めました。全国から集まった学生ですので、話だけでなく、地域理解の手がかりになればと、テキストとして『わが郷土上越』を使用しました。その後、大学の先生に交代するまで数回お手伝いしました。

それから、ちょうど、高田師範学校や新潟大学高田分校の同窓会である公孫会の80年を迎える時期でしたので、公孫会80年史である『公孫樹下の八十年』の編纂に携わりました。

— 『わが郷土上越<sup>93</sup>』について、もう少しお聞かせ下さい。

『わが郷土上越』は、上越市の中学校の地域理解や郷土を愛する心情の育成の一助として作成されたものです。とりわけ、静岡県清水市<sup>94</sup>と上越市の中学校生徒交歓会において、上越市の生徒にとっては事前学習の資料として、清水市の生徒にとっては報告会の資料として使用されてきました。この交歓会は、昭和28(1953)年に開始され、年2回の相互訪

<sup>89</sup> 越路町立越路中学校：現在は長岡市立越路中学校（長岡市来迎寺）。

<sup>90</sup> 柿崎町立柿崎中学校：現在は上越市立柿崎中学校（上越市柿崎区）。

<sup>91</sup> 小国町立法末小学校：現在の長岡市小国町にあった小学校（1988年廃校）。

<sup>92</sup> 新潟大学教育学部は新潟市のキャンパスに統合され、高田分校は1981年度末で廃止された。一方で、上越教育大学（上越市山屋敷町）が1978年10月に開学し、1981年4月に新入生が入学した。同時に、附属高田小学校・高田中学校が上越教育大学に移管された。

<sup>93</sup> 村山和夫他編『わが郷土上越—上越市の風土と生活—』新潟県社会科教育研究会・上越市中学校長会、1989年。

<sup>94</sup> 清水市は、2003年に静岡市と合併して静岡市となった。

問を 100 回、50 年の歴史を積み重ねて、発展的に解消されました。

— また、公孫会 80 年史の『公孫樹下の八十年<sup>95</sup>』の編纂では、どのようなご苦労がありましたか。

昭和 56 (1981) 年 12 月に、『公孫樹下の八十年』編纂委員は、9 名が委嘱されました。本書の発行は、翌年の 9 月 1 日と定められました。委員は激務の中、資料の収集、構成、執筆を進めました。原稿を 6 月末までのわずか 6 か月間で完成しなければならないので、大変に苦慮しました。ともかく委員には、本書の構成 (章・節・項目) を示して、これまで刊行された 50 年史から 70 年史、および「公孫会報」に見られる記事をもとに執筆可能な項目の原稿を提供してもらって、不足の部分については、手持ちの資料で補って構成しました。出版社には、原稿の差し替えもあることを、あらかじめお願いしておきました。当時は活字組みの印刷であり、たいそう苦労をお掛けしたようです。

最も力を注いだ点は、父が努力した高田師範学校の校舎火災の原因究明でした (前述)。資料調査にあたっては、高田分校の事務長のご協力を得て、大審院<sup>96</sup>の「判決書」を添えることができました。上越教育大学のある先生から、「この本はよくできていますが、誰が書いたのですか」と尋ねられて、「さあ」と答えたこともありました (笑)。

— 附属中学校にいらしたとき、他にはどのようなことをされましたか。

当時の附属中学校の校長は、柳本実教授でした。昭和 54 (1979) 年の 9 月の初頭、柳本教授から、「高田分校はいずれ廃止になるが、君も高田分校の『研究紀要』に論文を残すように」と、過大なありがたい命題を頂きました。稚拙でも資料として残るのは「小林古径の出生地論」であろうかと思い、「小林古径の幼年期の考察とそれにもとづく年譜の補正稿<sup>97</sup>」と題した論文を高田分校に提出したところ、研究紀要に収録されることになりました。

本論文執筆当時の古径の出生地については、「新潟県、新潟、越後、新潟市」との記述が多数を占め、「高田、高田市」はごく少なく、混乱していました。昭和 58 (1983) 年の「小林古径生誕百年記念展」の画集<sup>98</sup>の年譜作成の資料として、私の論文を引いて編成したと見えています。なお、本展覧会開催委員として、奥村土牛<sup>99</sup>・平山郁夫<sup>100</sup>・安達建二・河北倫明らの名が見られます。このような動きが契機になって、高田公園内に小林古径邸<sup>101</sup>が

<sup>95</sup> 記念誌編集部編・前掲『公孫樹下の八十年』。

<sup>96</sup> 大審院：1875～1947 年に存在した旧憲法下での最上位の裁判所。

<sup>97</sup> 村山和夫「小林古径の幼年期の考察とそれにもとづく年譜の補正稿」『研究紀要』第 24 号、新潟大学教育学部高田分校、1980 年 3 月。

<sup>98</sup> 京都市美術館・京都新聞社編『生誕百年記念 小林古径展』京都新聞社、1983 年。

<sup>99</sup> 奥村土牛：1889～1990 年、日本画家。

<sup>100</sup> 平山郁夫：1930～2009 年、日本画家。

<sup>101</sup> 小林古径邸：東京にあった古径の本邸・画室を高田公園に移築・復元した (2001 年公開)。

移築され、記念美術館<sup>102</sup>が設置されるようになったのではないかと考えています。

古径の生誕地は、上越市大町1丁目の青田川縁りにあった長屋の一隅です。現在、高田文化協会が建てた木柱がありますが、やがて朽ちると思います。

なお、附属中学校に着任した4月に、かねて編纂委員を受けてお手伝いしておりました初代上越市長の追悼録『小山元一追想<sup>103</sup>』が無事に完成し、関係機関・関係者にお届けする運びになりました。

— ところで、村山先生が社会科の授業をされてきた時期の教科書は、どこの出版社のものを使っていましたか。

清水書院<sup>104</sup>の地理はわりに良くできていました。しかし、清水書院はいいと思っても使いませんでした。この地域の教科書は、学校図書<sup>105</sup>が強かったという印象があります。おそらくですが、高田師範の先輩が学校図書に入っていたのかもしれませんが、「今年も学図か」という感じでした。

— (志村) 私が附属中学校の生徒だったときの昭和40年代ですが、学校図書の社会科地理的分野の教科書は、地域調査で合併直後の上越のことが記載されていました<sup>106</sup>。これは新潟県社会科教育研究会が書いたものだったのでしょうか。

そうです。新社研で書いたものですね。学図の教科書を使い、その教科書の中にも上越のことがあるという時期がありました。

## 1.2. 退職そして、その後の取り組み

— 附属高田中学校で副校長をされた後は、どちらにお勤めでしたか。

昭和56(1981)年に、学校指導課長で上越教育事務所に2年間勤めました。それから昭和58(1983)年から4年間は、校長として春日中学校(上越市春日野)にいました。新設校でしたので、校歌も生徒の決まりも何もありませんでした。そして、昭和62(1987)年から、直江津東中学校(上越市安江)に3年間勤めて、定年になりました(1990年3月)。

高田から離れたのは、松之山・越路・柿崎・法末の4か所でした。附属小学校に入学してから、高田城の堀の周りをうろろろしていた感じですね。また、いろいろな最初と最後

<sup>102</sup> 小林古径記念美術館：上越市立総合博物館と施設を共有して2002年に高田公園で開館した。

<sup>103</sup> 小山元一追想録編纂委員編『小山元一追想』小山元一顕彰出版物刊行会、1978年。

<sup>104</sup> 株式会社清水書院では、中学校社会科教科書を1952年から現在まで発行している。

<sup>105</sup> 学校図書株式会社では、中学校社会科教科書を1951年から1996年まで発行していた。

<sup>106</sup> 尾留川正平他『中学校社会地理的分野』(学校図書、1974年4月改訂検定、1975年1月発行、1975～1977年度使用)では、「身近な地域を調べる」中の「都市と農村の結びつきを調べる」例として「上越市直江津地区とそのまわりの農村」を取り上げている。



が多かったです。

— 村山先生は、『高田摘誌』や『高田藩』をはじめ、郷土史の本をたくさん書かれています<sup>107</sup>、退職された後になりますか。

そうですね、退職後のことになろうと思います。教員をやっているときのものは、あまりありません。先ほどお話したものくらいです。それから、自治体史が8つほどあります<sup>108</sup>。

— 村山先生は、どういうことを意識して勉強されてきたのでしょうか。

いや、意識はしていませんね。研究会で先輩から、あれやれ、これやれと言われて助かった時代でした。言われてやったというだけです。

社会科なら勤まるかな、という安易な所もあったかもしれませんが、勤めるからには、多少でもいいものという、そのくらいなものでした。学者になるつもりもありませんでしたが、新潟大学高田分校中学校社会科第一期生という自負は、少しばかりありました。

— 現在、手がけられていることをご紹介下さい。

現在、所属している団体での関わりについて言えば、上越郷土研究会の副会長の座にあります。本会は、昭和27(1952)年に創設された会です。会の主たる事業は、頸城<sup>くびき</sup><sup>109</sup>の文化に関わる論稿を集め、機関誌『頸城文化』の発行を重ねることです。いわば文化の灯火を絶やさぬよう努めていることでしょう。

公益財団法人旧高田藩和親会は、明治の世に旧高田藩士によって設立された歴史ある団体です。現在、公益法人に改組して活動を広げ、シンポジウムを開催するなど、市民に歴史への誘いに力を尽くしています。私も機関誌『和親会報』に高田藩にまつわる話題を載せています。平成25(2013)年には、「会津藩士中、高田謹慎解除後も当地に留まった

<sup>107</sup> 村山和夫氏による郷土史に関わる著書には次のようなものがある。村山和夫『シリーズ藩物語 高田藩』現代書館、2008年。村山和夫・前掲『高田摘誌—源氏車の栄光—』。法顕寺誌編さん委員会(委員長・村山和夫)編『法顕寺誌』法顕寺報恩記念事業委員会、1996年。村山和夫『青田川歴史散歩』青田川を愛する会、1995年。村山和夫編『越後高田藩主 榊原政令公時代』旧高田藩和親会、1990年、など。また、次のような編著書がある。村山和夫監修『青田川読本—青田川を愛する会の活動記録—』青田川を愛する会、2014年。高田開府400年記念誌編集委員会(執筆協力者・村山和夫)『高田開府四〇〇年』高田開府400年祭実行委員会、2014年。村山和夫監修・頸城野郷土資料室編『くびき野文化事典』社会評論社、2010年。新潟日報「源流百三十年」企画委員会(委員・村山和夫)『新潟日報源流130年 時代拓いて—越佐新聞略史—』、新潟日報社、2007年。『上越ふるさと大百科』(編集委員・村山和夫)、郷土出版社、2005年、など。

<sup>108</sup> 村山和夫氏は、上越地域における上越市、名立町、牧村、三和村、柿崎町、吉川町、安塚町、妙高村(すべて当時)の各市町村史の編纂に従事している。

<sup>109</sup> 頸城：越後国を構成した郡の一つ。おおむね現在の新潟県上越地域に該当する。「頸城」とも書かれる。

人々<sup>110</sup>」、平成 26 (2014) 年には「榊原喜佐子<sup>111</sup>様を偲ぶ<sup>112</sup>」の筆を執りました。

小林古径友の会においても、これまた会報に、主として古径の幼年期から岡倉天心<sup>113</sup>に見出されるころまでの様子について知り得たものを報告しております。近年、『幼年の友<sup>114</sup>』という雑誌に、古径が描いた赤穂浪士の挿絵を見つけました。この絵は、画集にもないので喜んでおります。また、どうしたら良いのか、思案しています。以上は、郷土の歴史に関わる 85 歳になっての近況です。

— 最後に、社会科の教師として大切なことをお聞かせ下さい。

日本だけでなく、世界中どうなるか分からないという御時世なのですから、知識と体験の統合による、いわば主体的な体験知が要求されます。広く何でも見たり、触れたりしてする勉強が大事であると思います。何を教えればいいのかというより、見る力から、考える力をどうやって育てていかれるか、いわば未来の知恵になる社会科が、子どもたちが生きていくために必要だと思います。うまく言えませんが。

— 本日は長い時間、本当にありがとうございました。

## 後記

ご多忙の中、快くインタビューの願いをお引き受けくださり、大変に興味深く、貴重な多くのお話を伺うことができた。村山先生の歩んでこられた足跡は、まさに高田の歴史であり、また、地域における中学校社会科教育史であった。しかし、村山先生が手がけてこられた郷土に対する探究の詳細な内容に及ぶことはできていない。聞き手の力不足を痛感するばかりである。

最後に、原稿をまとめる段階においても多くの貴重な資料をご提供くださるなど、多大なるご協力を賜りました村山先生に、心から御礼を申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用して頂きましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)

---

<sup>110</sup> 村山和夫「会津藩士中、高田謹慎解除後も当地に留まった人々」『和親会報』第 47 号、旧高田藩和親会、2013 年 7 月。

<sup>111</sup> 榊原喜佐子：1921～2013 年。徳川慶喜の孫として生まれ、榊原家当主の榊原政春（1911～2002 年）に嫁した。『徳川慶喜家の子ども部屋』（草思社、1996 年）や『殿様と私』（草思社、2001 年）等の著書がある。

<sup>112</sup> 村山和夫「追慕 才気溢れ気さくな榊原喜佐子様を偲ぶ—「和親会報」にお寄せ頂いたメッセージを通して—」『和親会報』第 48 号、旧高田藩和親会、2014 年 7 月。

<sup>113</sup> 岡倉天心：1863～1913 年、美術家・思想家。東京美術学校（現・東京芸術大学）を創設した。

<sup>114</sup> 『幼年の友』：1909 年創刊の実業之日本社による子ども向けの月刊絵雑誌。